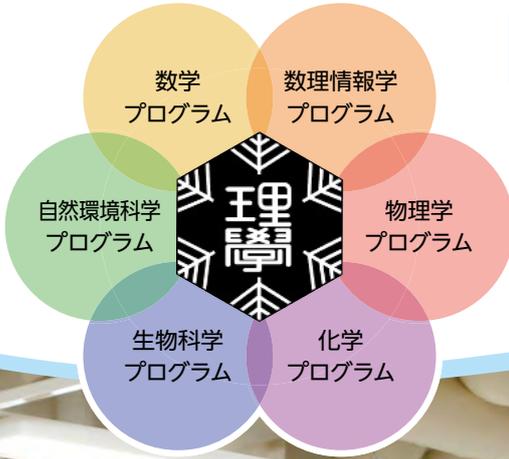


＊ 富山大学理学部後援会報 ＊

りっか Rikka

第21号
2026.3



後援会報の名称「りっか」とは…

「りっか」とは、雪の異称であり、漢字では六花と書きます。六角形の結晶の麗姿を花にたとえています。

私たちの理学部章は雪の結晶がモチーフとなっており、新理学部への象徴として引き継がれています。

理学部HP ▶



ごあいさつ

理学部後援会会長 城村 篤志

早春の候、後援会会員の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

今般、理学部会報「りっか第21号」を発行することが出来ましたのも、ひとえに皆様の後援会活動へのご理解、ご支援の賜物と感謝申し上げます。

近年、私たちを取り巻く社会は大きな転換期を迎えています。人工知能やデータサイエンスの急速な発展、気候変動や自然災害への対応、エネルギー問題など、複雑で正解の見えにくい課題が山積しています。こうした時代において、自然の原理、法則を深く理解し物事を科学的に捉える理学の役割は、これまで以上に重要性を増していると感じております。また専門的学識をもとに問題解決力を獲得することは、これからの社会を支える力になると考えております。

後援会は理学部在学生の保護者並びに支援協力者と理学部との連絡を密にすると共に、学生の教育活動及び就職活動を支援することを目的としています。今後も、理学部で学ぶ学生の皆さんが学問、研究に打ち込める環境づくりを、大学と連携しながら支えてまいります。引き続き、後援会活動へのご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



保護者の皆さまへ

理学部長 松田 恒平

理学部後援会会員の皆様、理学部の学部教育を支えていただき誠にありがとうございます。理学部教職員を代表して心より感謝申し上げます。皆様へりっか21号

をお届けいたします。4月より令和8年度を迎え、理学部改組3年目となります。改組により新規に設置した国際コースでは第1期の海外研修（マレーシア）を令和7年度に無事実施することができました。そこで今号では国際コース海外研修で派遣した学生諸氏の現地における学びや活動を取り上げました。参加学生の生き生きとした滞在状況が皆様に伝われば幸いです。また、従来とおり理学部学生の学修状況についても学生諸氏にインタビューしましたので、こちらでも有意義な大学生活を送っている様子を感じていただけましたら幸いです。大学運営費交付金の削減による教育活動への圧迫を常々危惧しておりますが、理学部後援会より毎年各学科/プログラムへご寄付を賜っており、支障のない理学部教育を施すことができますこと、後援会のご高配に心よりお礼を申し上げます。今後とも引き続き、後援会のご支援とご協力を仰ぎたく、どうぞよろしくお願いいたします。

2026年3月吉日

令和8年度 キャンパススケジュール CAMPUS SCHEDULE

4	●入学式 ●新入生 オリエンテーション ◆新入生保護者懇談会 ●授業開始（前期・第1ターム）
5	
6	●第3年次編入学試験 ●授業開始（第2ターム） ◆北陸地区 国立大学体育大会 ◆後援会理事会・総会
7	
8	●期末試験・集中講義 ◆オープンキャンパス ●夏季休業～9月 ●大学院入学試験 ●国際コース海外研修～9月
9	◆サイエンス フェスティバル
10	●授業開始 （後期・第3ターム） ◆開学記念日 ◆大学祭 ◆北陸三県大学 学生交歓芸術祭 ◆就職・進学合同説明会
11	●総合型選抜・社会人選抜・帰国生徒選抜
12	●授業開始（第4ターム） ●冬季休業～1月
1	●授業再開 ●大学入学共通テスト
2	●期末試験・集中講義 ●卒業論文発表会 ●春季休業～3月 ●一般選抜（前期日程）、私費外国人留学生選抜
3	●一般選抜（後期日程） ●学位記授与式

理学部理学科6プログラムがスタート！ —国際コース海外研修レポート—

2024年4月から理学部理学科がスタート。一般教養と理学の基礎を学び終えた1年次の学生が2年次（2025年4月）へ進級し、各プログラムへ配属となり専門教育が始まりました。

6プログラム分野横断型の国際コースの学生がマレーシアに海外研修に行ってきたのでここに紹介します。

〈留学先国〉マレーシア
〈留学先大学〉トゥンク アブドゥル ラーマン大学(UTAR)
サンウェイ大学マレーシア校
モナッシュ大学マレーシア校
〈人数〉理学部理学科国際コース2年生 15名
〈期間〉2025年9月1日(月)～10月5日(日) 35日間



—どのような授業や活動に参加しましたか？

1ヶ月間という長い期間、前半は英語やマレーシアの文化や料理を学びました。また後半は、マレーシアの生態系を学び、フィールドトリップとして森や川に訪問し観察などを行いました。現地の先生方から分かりやすく教えて頂き、とても充実した授業でした。大学で学んでいる数理情報学分野とは異なった生物学を学びましたが、「自身が学んでいる分野と結びつけることができた」と発見でき良い機会となりました。



数理情報学プログラム
2年生
中村 倫之介さん

—他言語による授業で困難だったこと、それをどう乗り越えましたか？

理学系（特に生物学）に関する英単語をあまり知らなかったのが、授業の際に英単語が分からなかったことがありました。分からなかった英単語が聞いた瞬時に、その英単語の意味を自身で調べ、完全に覚えられるまでに随時暗記を行っていました。また、週に2、3回のポスターでのプレゼンテーションは、自身の言葉で表現する難しさだけでなく、英語で人に伝わるようなプレゼンテーションを行う難しさを痛感しましたが、プレゼンテーションの回数を重ねる毎に慣れていきました。

—留学前と比べて、自分が成長したと感じる点は？

20年間生きてきた中で、初めての留学でしたし、初めて大好きな家族と長期間離れ、身の回りのことを1人で行う機会でもありました。生まれてからずっと家族と過ごしてきたこともあり、マレーシアについてから数日でホームシックになることがありました。それでも弱音を吐かず最後までやり遂げて日本に帰って来れた自分が、大人に一歩近づいたのを感じました。このような貴重な体験をさせてくれた家族に改めて感謝したいです。



—どのような授業や活動に参加しましたか？

UTARでは、前半にマレーシアの文化、後半に理学部で生物学や環境学などを学びました。特に、後半はフィールドワークでマレーシア固有種のアカエトリバネアゲハの観察などに行き、日本では出来ない貴重な活動を体験しました。



物理学プログラム
2年生
笠原 福人さん

—マレーシアの文化や社会について、驚いたこと・興味深かったことは何ですか？

マレーシア社会は、マレーシア、中国、インドにルーツを持つ三民族が入り混じっており、それぞれの文化が混ざって新しい文化となっているものが多く、とても驚きました。

—現地の学生や教員とどのような交流がありましたか？

現地の学生や教員の皆さんとは、お勤めのご飯と一緒に食べたり、日本との相違点を英語で喋るということを頻繁にしていました。とても親切で、困ったときもすぐに助けてくださりました。

—寮や滞在先での生活はどのようなものでしたか？

寮では、理学部の色々なプログラムの生徒と五人一組の班で生活しました。出身地も異なり初対面も多かったので心配でしたが、研修を通してとても仲良くなることができました。

—この経験を通じて、将来の進路や研究に対する考えは変わりましたか？

今回の経験が、とても強く影響を受けると思います。日本に住んでいると、どうしても日本の社会や文化の中で育まれた価値観を基準に物事を考えてしまいがちです。日常生活の中では、それが当たり前であり、むしろ心地よい安心感を与えてくれることもあります。しかし、実際にマレーシアへ行き、異なる文化や生活習慣、人々の考え方に触れることで、自分がいかに限られた視点の中で生きていたのかを強く感じました。これまで以上に広い視野で物事を考えられるようになり、将来の進路や研究においても、多様な立場や考え方を尊重しながら取り組みたいと思いました。

海外研修の動画はこちらから→
<https://www.youtube.com/watch?v=FEEasO-UPos>



本海外研修の実施にあたり、研修費用の一部を後援会よりご支援を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

大学での生活や研究の体験で得たこと

理学部では、さまざまな演習や実験、研究が行われています。それぞれの研究室やゼミで、さまざまな発見や、アクシデントに出会いながらも、充実した研究ライフを送っている学生たち。

数学科、物理学科、化学科、生物学科、自然環境科学科の皆さんに、日々の研究の中で印象に残った体験や、これからの進路と将来の夢についてお話を聞きました。



数学科 4年生
しみず あおと
清水 碧人さん
(島根県出身)

—今の学科を選んだ理由をお聞かせください。

好きな数学をもっと学びたかったからです。出身は島根県ですが、本学を選んだのは「サイエンスフェスティバル」への熱意に惹かれたからです。興味ある分野を研究されている先生の存在も決め手になりました。

—研究内容について教えてください。

私が学んでいるのは、数式を決まったルールで入れ替え続けた時に現れる、共通の構造や法則を研究する理論「クラスター代数」です。具体的には教授から指定されたテキストの部分の部分を自分なりに解釈して、学生の前で発表するという形で学んでいます。わからないところだらけですが、順序立てて理論的に考えていくと、わかることが少しずつ増えていくのが面白いですね。

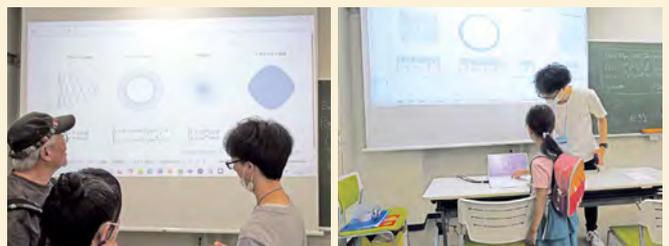
—この研究をしようと思ったきっかけは？

3年次のプレゼミで、フリーズという概念を学んだことがきっかけです。クラスター代数はそれを発展させたもので、2000年頭頃に

生まれた新しい概念ということを知り、非常に興味を持ちました。

—富大理学部に入って良かったことは？

一番良かったのは、「サイエンスフェスティバル」に参加できたことです。そのイベントを通して、先輩や同級生と深く関わることができました。先輩から授業内容について教わったり、同級生と一緒にレポートを考えたり、そういう時間を作れたことがすごく嬉しかったです。これからは、父と同じ公務員という道に進む予定です。社会に出ても、本学で培った論理的思考を生かしていきたいと思っています。



2024年サイエンスフェスティバル数学科ブース

—今の学科を選んだ理由をお聞かせください。

高校の物理は、単元ごとに公式があり、それらを変形して答にする「パズル」のような爽快感がありました。富大に入ったのは、その学問をより深く学びたかったからです。大学の物理は、ひとつの基礎方程式を出発点に答えを導くため、最初は自由度の低さを感じていましたが、ある時その構造に一貫性があり、すべてが繋がっているという面白さに気づきました。魅力的な学問です。

—4年になったら、どんな研究をする予定ですか？

本学科が携わっている「重力波に関するプロジェクト」に、私も関わりたいと考えています。重力波とは、宇宙から届く放射線の

一部のこと。それを測定することで、ブラックホールの謎や、その誕生に密接に関わっている星の歴史を調べることができると考えられています。

—この研究をしようと思ったきっかけは？

高校の時から「大学でしかできないような最新の研究・実験に触れたい」と思っていたからです。また、「サイエンスフェスティバル」で、重力波の検出に用いられている「マイケルソン干渉計」を紹介した時、担当の先生からさまざまな助言をいただいたこともきっかけになりました。



物理学科 3年生
まるおか あきひろ
丸岡 晃裕さん
(滋賀県出身)

—これからの進路と将来の夢は？

大学院へ進学し、岐阜県にある施設で実際に重力波をキャッチしてみたいです。そして、将来は物理で学んだことを生かして、カメラレンズなど光学系の開発をしたいと考えています。風景などの写真も撮ることも好きなので。



サイエンスフェスティバル

—今の学科を選んだ理由をお聞かせください。

高校の時、化学反応が好きだったので、地元の大学で化学を学びたいと思ったからです。実際に今は深く学べているので、入って良かったなと思っています。

—研究内容について教えてください。

光によって着色する化合物「ポロニウム錯体」について研究しています。分かりやすい例で言うと、色が変わるサングラスやお札の偽造防止などにも、そういう化合物が用いられています。ただ、使用する化合物によって、着色時の色や変化する時間などが異なるため、まずは市販の化合物を使って論文通りに合成・実験するところからスタート。色の多様化を図ったり、どのような環境下でも安定性を維持できるように機能性の向上を図ったりして、目的の化合物を作っていきます。

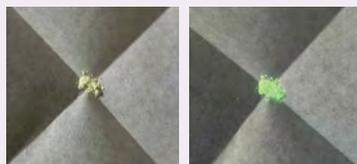
—この研究をしようと思ったきっかけは？

3年次の研究室紹介や先輩からの話などで、光によって色が変わることに興味を持ったのがきっかけです。また、ホウ素を含む化合物の構造を少し変えるだけで、着色時の色が変わるところにも面白さ

を感じました。研究室で初めて測定を行った時には、先生や先輩から丁寧に教えてもらえました。今も質問しやすい雰囲気です。

—これからの進路と将来の夢は？

大学院に進学し、今の研究を続けていきたいと考えています。院にいる間に、化合物の機能性を向上させることができればいいなと思っています。そして、高い専門知識を持った修士になり、社会の役に立つ研究職に就きたいと思っています。



ポロニウム錯体の自然光照射時(左)と紫外光照射時(右)の写真。紫外光照射時には蛍光発光している



化学科 4年生
にいだ はるか
西田 遥翔さん
(富山県出身)



錯体(左)の合成を行っている写真



生物学科 4年生
さいとう ゆか
齊藤 佑風さん
(富山県出身)

—今の学科を選んだ理由をお聞かせください。

小学校の頃から水族館や動物園に行くのが好きです。例えば、馬やシマウマなど同じ祖先から別種になるという、生物の多様性や進化の仕組みに興味を持っていました。本学科を選んだのは、分子から系統まで幅広く学べる点に魅力を感じたからです。また、実際に海や山で藻類を採取して顕微鏡で観察するなど、生物学の基礎を実践的に学べる点も決め手になりました。

—研究内容について教えてください。

本来は進化といえば、単細胞から多細胞ですが、多細胞性の藻類である「クレブソルミディウム」から進化した単細胞性の緑藻「インターフィルム」がいます。一見、退化のように思える非常に興味深い題材を先生からご提案いただき、研究に取り組み始めました。その緑藻を元気に育てDNAを抽出し、ゲノム情報を用いた解析を行うことで、進化の原因を探っています。

—研究を通して得たことは？

解析用語を覚え、軽いプログラミングでソフトを動かせるようになったこと、また自分で試行錯誤しながら問題を解決する力が身についたことが、すごく嬉しいです。また、統計などに活用できる情報解析の技術を身につけられるところも、この研究の魅力です。

—これからの進路と将来の夢は？

研究を重ねるうちに、生物の進化を研究することよりも、「知る」ことの方が好きな自分に気づきました。さらに、知る側から発信する側になれたらという気持ちから、卒業後はメディアへ就職する予定です。



・培養しているInterfilum
→研究対象の藻類の写真です



・スケッチした貝
→野外実習で採取した貝のスケッチです

—今の学科を選んだ理由をお聞かせください。

高校時代に、環境に興味を持ちました。自然環境科学科では、科学や物理、生物、地学など、広範囲な学問を複合的に学ぶことができます。自分が求める方向性に合致していたので、地元との距離は気になりませんでした。

—研究内容について教えてください。

私が今、特に危機感を持っているのは、環境ホルモンと言われる物質。生物がそれを少しでも摂取すると、生殖器の異常や皮膚の病気などさまざまな問題が生じると言われています。そうした物質を人間に投与しないために、ラットなどの細胞を使ってその物質の影響を調べることが、私の研究の根幹。具体的には、光ファイバーに細胞を接着させ、カドミウムを暴露した際の細胞の応答をリアルタイムに測定する研究に取り組んでいます。また、その細胞に色を塗って変化を確認することで、何時間で死に至るのか、ストレスが出るのかなどを調べています。

—研究室の雰囲気は？

インドネシアからの留学生も数人在籍しているため、日本語と英語が日常的に飛び交っています。英語で伝えるスキルが自然と高まる環境に居られることもありがたいですね。

—これからの進路と将来の夢は？

大学院に進学し、今取り組んでいる研究をさらに発展させていきたいです。今の目標は、食品に細胞をつけた光ファイバーを入れて、食品添加物による人体への影響を調べること。そして将来は、分析化学の知識を生かして、社会の役に立ちたいと考えています。



光ファイバーに細胞を接着させている様子



拡大図



自然環境科学科 4年生
たかはし そう
高橋 奏羽さん
(青森県出身)



研究者レポート

—理学部の若き研究者たちの最新情報を公開—

理学部の学生は、どんな研究をしているのでしょうか？
学生が先輩たちに研究内容をインタビューし、
その内容を分かりやすく紹介した記事を掲載します。

インタビューー

後藤 博英、橋口 晃明、
黒瀧 俊

なか やま
中山

さとし
聡

File #033



profile

大学院理工学研究科
地球生命環境科学プログラム博士前期課程1年
出身地：群馬県
趣味：爬虫類・両生類の飼育、観察

子育てするカエルに魅せられて

アイフィンガーガエルと聞いて、あなたはピンとくるでしょうか？取材班の第一印象は「海外の変わったカエルなのかな？」であった。このカエルは、沖縄から台湾にかけてのみ生息し、冬眠せず子育てを行うという珍しい生態を持っている。今野紀文研究室でアイフィンガーガエルについて研究し、「2025年度日本動物学会中部支部静岡大会 優秀口頭発表賞受賞」、「2025年度笹川科学研究助成採択」など様々な成果を残す博士前期課程1年の中山聡さんにお話を伺った。

「好き」を研究に

中山さんがこの研究に取り組んだのは、子供の頃の体験によるものが大きい。田んぼの残る地域に育ち、カエルや虫を捕まえて遊んでいたという。大学進学後も、生き物への興味は尽きなかった。「面白みのある生物の多様な生態を知りたい！」——そんな純粋な探究心が、国内に生息するカエルでは唯一、「子育てをする」というアイフィンガーガエルとの出会いに繋がった。休日も研究室に通い詰め、生き物の世話をする生活を「趣味の延長」と笑って話せるのは、根底に揺るがない生き物への愛があるからだろう。

初めての研究の苦労

極めて珍しい生き物を研究するという事は、困難の連続である。生息する石垣島、西表島での現地調査では、生息箇所を突き止め採集するだけでも非常に苦労したという。その過程でも人工物に産卵することなどの新しい発見もあったという。生態が良くわかっていないので、毎日が発見だ。「何がエサとして適するか？」「どうやって



図1. 研究室で飼育しているアイフィンガーガエル

親子でコミュニケーションを取るのか？」「どのように繁殖するのか？」など様々な部分で手探りの状態が続いた。例えば、飼育ケージ内に自然木を入れるとダニが湧いてしまうためビニールホースで代用したり、環境の変化に敏感な親ガエルのためにケージを布で覆って安心させたりと、教科書には載っていない独自の工夫を積み重ねた。

しかし中山さんは、そうした困難さえも「新規性の高い研究であり、趣味の延長だから楽しい」と語る。自分自身の手で謎を一つひとつ解き明かしていく過程そのものが最大のモチベーションになっているようだ。

極限環境を生き抜くオタマジャクシ

親ガエルだけでなく、その子供たちにも驚くべき生態が隠されていた。彼らが育つのは、木の洞などにできたごく小さな水溜まりである。閉鎖的で水量が少ない環境では、通常であれば排泄物によるアンモニア濃度が致死レベルに達してもおかしくない。しかし、このオタマジャクシは「フンをしない」という特殊な方法で水質汚染の進行を防いでいるという。それでも避けられないアンモニア濃度の上昇に対して、なぜ彼らは致命的な影響を受けず生存できるのか。そのメカニズムを解明することも、大きな研究テーマの一つとなっている。

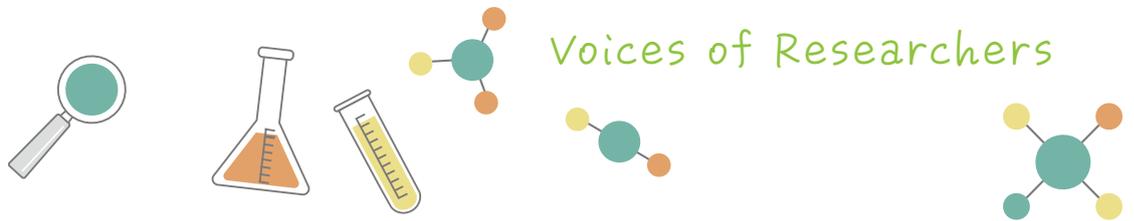


図2. アカフィンガーガエルのオタマジャクシ

研究は実験室の中だけで終わらない。中山さんは今後、西表島の西表野生生物保護センターと協力し、さらなる保全や生態解明に繋げていきたいと展望を語ってくれた。

研究のこれから

実験室での分析や観察と、大自然の中でのフィールドワークを車の両輪として、自分だけのテーマに没頭できる環境がここにはあると感じた。希少な野生生物を守り、その生態の不思議を紐解くこと。知の地平線を広げる挑戦が続いている。



インタビューー

江崎 弘暉、佐々木 晴輝、
富田 大翔

ながい あゆき
永井 歩輝

File #034



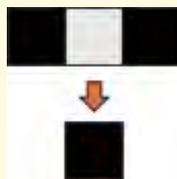
profile
大学院理工学研究科
数理情報学プログラム博士前期課程1年
出身地：岐阜県
趣味：友達とのスマホゲーム

現実をシミュレーションする

貝殻の模様はどのようなルールに従ってできているのだろうか。実際には複雑な仕組みも、実は、数学を使ってかんたんに表現できるかもしれないのだ。永井さんが所属する秋山正和研究室は、数学を使って生物が持つ「かたち」のシミュレーションに取り組んでいる。「複雑な現象を、単純なルールで説明しよう」という挑戦である。永井さんはセルオートマトンという手法を用いて、アサリの貝殻の模様のシミュレーションに挑んだ。

アサリの模様に挑む

セルオートマトンとは、格子状のマス目(セル)があるルールに従って、時間とともに周囲のセルの色を決めていくシミュレーション手法である。例えば、右図のように黒白黒とセルが3つ並んでいる場合、「真下のセルは黒」といったルールに従って周りのセルの色を決める。



ルールの1例

永井さんはまず、アサリの貝殻の一部分の模様を白と黒の2色で表現した(図1)。この工程を二値化という。次に、セルオートマトンを使えるようにするために、図1を格子状のセルに変換し(図2)、模様を持つ法則性を計算した。しかし、得られた法則に忠実にシミュレーションをすると、上手いいかない。そこで、一定の確率で法則が逆転するノイズを入れた。セルオートマトンで再現した模様と、貝殻との一致率は増したが、完全な再現には至らなかった。研究の中で永井さんが苦労したのは、二値化の作業だった。「ぼやけてうっすら色が見える部分は、二値化するとき全て白色に変換されてしまうことがある」と語る。試行錯誤の中、一致率向上のため三色で変換する手法も考えたが、



アサリの貝殻

図1

図2

データ量が大きくなりすぎることから断念したという。問題を解決しようとする新しい課題が生まれてくる、そんな応用数学の難しさを痛感する体験だった。

研究を通じて

アサリの模様の研究から、2次元モデルを扱う力を培った。数理モデリングの面白さは、良くも悪くも結果が示されることにある。「思い通りのものを出力できた」という小さな成功体験の積み重ねが、日々の研究のモチベーションに繋がるのだという。これまでの知見を活かし、現在は3次元モデルにステップアップした。ウニやナマコなどの、棘皮動物の卵ができていく様子を予測するための数式を作り、計算機でシミュレーションしている。次々と新しい数理モデルに挑戦する永井さんなら、やり遂げるに違いない。

壁や仕切りのない研究室



談笑する永井さん達

永井さんの机がある部屋は、専門分野の異なる学生が研究室を超えて集う。研究に行き詰まったり、アドバイ스가欲しかったりする時には、気軽に意見

を求めることができる。昼食を囲みながら話が弾むことも多いそうだ。「壁や仕切りがなく、会話に先輩が混ざることもあるし、環境はすごくいいと思います」と笑顔で話してくれた。

後輩へのメッセージ

「自分がやりたいことをやってみよう、そういう意味で大学院進学はすごくいいんじゃないかなと思います。研究に没頭した経験は、人としての強みになれるかな」と永井さんは語る。応用数学はこれからの社会に必要な不可欠な分野であり、企業の注目度も高い。自然現象をシミュレーションで表したいという想いで、研究テーマを決めた永井さんは卒業後、就職する道を考えている。今後の活躍に期待したい。

令和7年度 理学部後援会予算

収入の部		(R7.4.1~R8.3.31)
費目	金額(円)	摘要
繰越金	1,106,633	
後援会費	3,360,000	・R7入学生入会予想率 75% ・過年度入学生入会者
預金利息	766	
合計	4,467,399	

支出の部

費目	金額(円)	摘要
事業費	3,168,000	保護者への案内・通信 100,000
		学習・実験設備等充実費 2,250,000
		サイエンスフェスティバル支援 65,000
		学生表彰 150,000
		TOEIC 試験受験支援 50,000
		印刷費(会報) 350,000
		海外語学研修支援 180,000
		サイエンスメディアエーター記念品代 5,000
		新入生交流会支援 18,000
		事務費
会議費	30,000	理事会・総会
人件費	200,000	
予備費	1,019,399	
合計	4,467,399	

令和7年度 理学部後援会予算収支中間決算報告

収入の部		(R7.4.1~R8.3.31)
費目	金額(円)	摘要
繰越金	1,106,633	
後援会費	2,940,000	R7入生他
預金利息	1,933	
合計	4,048,566	

支出の部

費目	金額(円)	摘要
事業費	2,779,979	保護者への案内・通信 118,384
		新入生交流会助成 14,595
		学習・実験設備等充実費 2,250,000
		サイエンスフェスティバル支援 93,000
		学生表彰 64,000
海外語学研修支援 240,000		
事務費	40,646	事務用消耗品類 14,019 後援会費振込手数料負担分 26,627
会議費	27,407	理事会・総会 27,407
人件費	183,870	事務員手当 183,870
予備費	1,016,664	次年度繰越金 1,016,664
合計	4,048,566	

理学部後援会への入会のお願について

理学部後援会は、保護者と理学部との連絡を密にし、「学生の教育活動及び就職活動等の支援」を目的に設立され、多くの支援を行ってまいりました。

保護者の皆様におかれましては、後援会設置の趣旨をご理解をいただき、是非ともご入会いただきますようお願いいたします。

会費：学部学生(20,000円)、編入学生(10,000円)(いずれも入会時のみ。)

令和7年度 理学部後援会役員

会長	城村 篤志 (1年理事兼任)
副会長	堀田 貴子 (4年理事兼任)
副会長	若杉 達也 (教員理事兼任：生物科学プログラム教授)
理事	松田 恒平 (理学部長)
理事	保護者 各学年2名 (計8名)
理事	教員 各プログラム1名 (計6名)
理事	賛助会員 2名
監事	竹下 真理子 (正会員)
監事	秋山 正和 (数理情報学プログラム准教授)

令和7年度卒業予定者の進学・求職・就職状況

	男	女	合計
① 卒業予定者数(未回答を除く)	136	48	184
② ①のうち進学者数	81	17	98
③ 進学率【②/①(%)】	59.6%	35.4%	53.2%
④ ①のうち求職者数	55	31	86
⑤ ④のうち就職内定者数	47	29	76
⑤のうち富山県内	10	13	23
⑤のうち富山県外	37	16	53
⑥ 内定率【⑤/④(%)】	85.5%	93.5%	88.4%

令和8年2月27日時点調査

令和7年度理学部学生表彰

表彰の基準は、「特に成績の優れた者」です。
学長表彰者として2名、学部長表彰者として15名が選ばれています。

学長表彰

数学科	物理学科
山越 圭 恭	中村 優 太

学部長表彰

数学科	物理学科
大橋 樹 己	前田 惇 志
半田 啓 佑	川村 光 翼
今出 誠 也	二木 綾 太

化学科	生物学科
横田 千 聖	宇津木 奏 那
内田 絢 日	堀田 勇 大
前田 大 河	大鹿 光 生

自然(生物圏)環境科学科

日比野 晴 穂
加藤 大 奨
寺田 瑞 季

編集後記

りっかの編集後記を書き始めて6年、富山大学の教員生活もそろそろ四半世紀になるアラ還教員である。毎年、同じ年の学生と接していると、自分が歳を取っていないかと錯覚に陥るが、体だけは正直である。地球温暖化の研究をしているため、自然環境の未来を危惧しているが、昨今の戦争や紛争、物価高騰など、私たちの生活環境は不安定な気がしてならない。小さなことかも知れないが、同じ大学生の子どもを持つ親として、学生がワンコインでランチが食べられない現状に困惑する。この春、理学部理学科は3年目。もっと自由に、もっと楽しく学べる学部・大学になるよう尽力しつつ、学生たちを応援していきたいと思っています。今後とも、理学部ならびに後援会へのご理解ご協力のほど、よろしくお願い致します。

(理学部広報委員長・青木一真)

富山大学理学部後援会

〒930-8555 富山市五福3190
TEL 076-411-4803
FAX 076-445-6549
<http://www3.u-toyama.ac.jp/safs/>
e-mail safs@sci.u-toyama.ac.jp



リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。